

句遊

第十七集  
令和七年三月

## 俳句で縁づくり

中山 祐伸

私が俳句を作り始めたのは六十歳を過ぎてからです。それも先輩に句会に誘われたからです。五七五の十七字なので簡単にできるかと思っていました。ところが私の句は、少ない字数制限の中で内容のある表現が出来ず、句会で全く評価されませんでした。それでも二、三年たつと、俳句のリズムに慣れたためか、時々、評価してくれる句も出てきました。そうなるとやる気も出てきます。俳句が面白くなりました。今では俳句を作るのが楽しみになっています。俳句作りの約束事も、メリハリをつけるものだったり、入口の狭さが奥行きをもたらしているように思えてきました。このような思いは、俳句を楽しむ多くの方に共通するのではないのでしょうか。だからこそ、俳句が長い間人気を保ち、今もブームが続いているのでしょう。

俳句作りにはいろいろな楽しみなどが詰まっています。例えば、

短い字数で、簡潔に思いをまとめられます。

五七五のリズムがあるので、覚えやすいこともあります。

作者は発想を飛ばすことも多く、その鑑賞には連想を誘い、それらが一つ一つの俳句を幅広く奥深いものにしていきます

ある方が「俳句一つ一つに人生がある」というのを聞きました。まさにその通りと思います。

最近私が強く感じているのは、俳句を通じての「縁づくり」です。

俳句は「座の文学」と言われています。俳句を通して人との縁を深めてゆく良い手段と思います。さらに縁づくりは人との関係にとどまりません。風景、習慣、生き物など、自分との関係で周りの世界を詠み込みますので、世界のいろいろな事象と自分との間に「新たな縁」を作り出せます。普段気づかなかつたり何となく見ている物事との間にハッとする出会いはあったり、深い関係を築けたりします。俳句は「縁づくり」で世の中を豊かにしているのではないのでしょうか。

監査懇話会の生涯学習部会の一つである「句遊会」はそんなことを楽しめる会です。多くの方との縁づくりができることをお待ちしております。

# 目次

能登の地震	佐藤 政百	六
家族のことなど	眞田 宗興	八
八十路のゴルフ	森 邦彦	一〇
縁づくり	中山 知祐	一二
下 萌え	石原 克己	一四
けやき坂	安井 正浩	一六
辛口ワイン	城戸崎雅崇	一八
平 凡	川田 勝美	二〇
四季を楽しむ	新谷 亮介	二二



作

品

能登の地震

佐藤政百

地震襲ふひび割れ泥に鏡餅

冬晴れや猫おめかしの毛づくろい

寝そべつて牛の反芻下萌ゆる

声かけにうなづく少年春休み

げんげ田に皺の笑顔や養蜂家

緋桜の雨に燃ゆるや神代園

ジャスミンの花に二とき香に三とき

一瞬の獲物捕る舌墓蛙

貝塚や緑陰に聴く波の音

大夕焼秀丽富士を焦がしをり

消え行くはローカル電車枇杷熟るる

鉄の町鉄の匂ひの大暑かな

夏痩せや夕日に伸びる己が影

生姜齧るあいつと飲んだ夜も生姜

足音に歪む望月にわたずみ潦

八甲田山紅葉の海に眩みけり

湯冷め酔ひ醒め細り行く心かな

煤逃げの猫のご帰宅すまし顔

家族のことなど

眞 田 宗 興

一筋の夕焼け燃えて冬の月見ゆ

核とは何か知っている日本春よ来たれ

春眠や仏のようにほほに手を

桜花川辺に菜の花あるぞよと

窓にそよ風幸せと思ふ五月晴

長雨や本を抱えて眠りけり

塩水に一匹別居の金魚生きよ

胃カメラを飲んで後は野となれ山となれ

秋の夜やいびき咎めた妻もかいており

蟻を殺したり何らの罪も無いけれど

後輩の女性監査役冬薔薇

秋の夜にひとり老人の叫び声

竹伸びる孫には孫の思ひあり

雨降るや偉くならずも子を作れよと

妻の小言無くて寂しや夏の暮れ

秋の夢故郷の道歩いていた

長生きが生きることなり冬来る

孫の顔湯船の中の紅葉かな

## 八十路のゴルフ

森 邦彦

去年今年悲喜こもごもに輪転機

舞殿の十二単に舞ふ歌留多

恵林寺の栄華を偲ぶ冬の庭

底冷えの町家に笑顔ありし兄

荒海に黒雲垂れて雪催

荒ぶ能登地震の痕にも下萌える

受験子の電話の向かう晴れやかに

城崎は外湯めぐりに吹く柳

万緑にデゴイチの煙意気高し

京町家格子も揺らぐ大暑かな

蓼科に八十路のゴルフ夏嶺見ゆ

炎天下カートを過ぐる風うれし

茅葺きの家の涼しき風土記の地

足湯さへ石段にそふ秋伊香保

田の恵投げて取り合ふ秋祭

ゆらゆらとせせらぎ望む鬼怒の秋

富士望む脇玉池に潜る鴨

本願寺畳も叩き煤払

見たものを面白く表現することが大事。

昨年から句評を頂いている現代俳句協会の方の句評を参考に工夫をしたい。

縁づくり

中山知祐

絵札置く孫のたくらみ歌留多取り

につこりと上目遣ひでお年玉

夜桜や歩みののろい亀になる

武者のぼりわんぱく坊やひとにらみ

ガリヴァーの襟に挿したしアマリス

夕涼み石灯笼に眠る猫

揚げ茄子の煮浸し二つ喜寿の昼

なでしこや幼児のほほ母のほほ

夕霧の沸く山並みや湯の香り

待ち遠し隣家の庭に柿たわわ

餅つきや手伝いか邪魔どつちかな

海苔掬ふ真白き富士の富津沖

立春や電線ピンと空よぎる

かたくりや小さきおじぎでお出迎へ

狭き世や満悦至極墓

裏木戸を抜けてとけこむ万緑へ

もぐもぐと口に夜食と英単語

秋祭このたこ焼きも二皿目

下 萌 え

石 原 克 己

蛤に醤油ひとさし炭赤く

ブナ林の根元に丸く春の土

吟行の小道音なき木の芽風

流れ背に瘦身そよぐ矢車草

焼き魚振り塩光る大暑かな

撫子の澄みし花色霧ヶ峰

望月の石段に影山の寺

秋草や夕べに流る湯のけむり

石段にもみじ葉ひとつ伊香保の湯

海苔粗朶にうねり静かに日をのせて

下萌えに足投げ出して遠き嶺

やはらかに雨にとけ込む雪柳

花菖蒲タナゴ数匹株の間に

暗闇にのつそり蝦蟇や寺の池

万緑に埋もれて古き山の寺

釣り人の姿も見えず盆の入り

公園の紅葉を濡らす雨の色

川舟の舳先にとまる赤蜻蛉

けやき坂

安井正浩

忘れ物探してるよな雪催

篝火の妖しく揺らぐ桜の夜

葉桜の濡れて濃さ増す無縁坂

ゆつたりと舟が舟曳く大暑かな

撫子を見つめる妻を見ておりぬ

望の月よべも雲間にまぎれをり

空つ風駅の自転車総倒し

無事祈る工事現場の鏡餅

沢の字の残る公園春を待つ

園児らの歓声あがる春田道

老木の周り固める木瓜の花

風薫る三連水車停止中

眼の合ひし大蟊蛙たぢろがず

万緑の先へ伸びゆく送電線

戸板一枚流れゆく秋の海

夜食とる間をも警戒雨合羽

紅葉やグラデーションの櫛坂

雨止んでけやき通りの冬霞

辛口ワイン

城戸崎 雅崇

地に触れてなほ舞ふもあり落花かな

夜桜に惹かれて一人歩きかな

世に何もなかりしごとき春田かな

歩み入る枝垂桜の檻の中

この誘ひ断るべきやアマリリス

枇杷の実に飛び込んで行く鳥の群

風薫る午後の庭園コンサート

五月雨やポワロ一冊読み終へる

フェリーー行く豊後水道雲の峰

蒲の穂の揺れ自転車は走り去る

秋雨や伊香保の宿は古色帯び

いささかの後悔のこり昼の虫

稜線の少し翳りて秋の雲

未練とはなほも待つこと鳳仙花

大皿の河豚刺し辛口白ワイン

口喧嘩は妻に分があり空つ風

木杓子で鍋よりよそふ納豆汁

池の面にモネの筆致の冬の雲

喜寿の二〇一〇年に句遊会に入会して俳句を始め  
て一四年が経過した今年の『香雨』と『氷室』の新年  
号に短い「句歴」と「吟行記」が掲載されました。

平 凡

川 田 勝 美

那智の蛤碁石で囲碁三昧

思い出す祖父の育てたアマリリス

朝露に漏れてまろやか枇杷光る

甕の中鈴虫の音に耳すます

秋の旅伊香保の土産思案する

空つ風背中丸めて歩急かす

餌に貝を混ぜて産ませた寒卵

咲き誇るさざんか眺めバスを待つ

都会捨ていつまで続く草むしり

花見後名物そばで舌づつみ

風薫る碁仇の待つ碁会所へ

五月晴れ野球判定リスニング

無事終わる総会の帰路ソーダ水

秋の海人影まばら波の音

から揚げを土産に買って夜話を

秋祭り担ぐ女に歓声を

ゆく秋をしぶきをあげ鬼怒川下り

くる年の幸せ願い煤払い

四季を楽しむ

新谷亮介

子ら遊ぶボールの先に梅一輪

陽射し待つ庭の立ち木や雪催

日に雨に膨らみ待つやしだれ八重

池辺にて静けさ飾る矢車草

色香良し梅の実拾ふ果報かな

撫子の咲く川野辺や隠れ池

望月に木の葉の映える野天風呂

遠き日の恩師の庭の柿の味

顔揃い夜を早めて葱鮪鍋

山茶花や白く咲き散る月明かり

焼鳥の火の勢いやコップ酒

山道に差し入る朝日下萌る

また一人逝きたる報せ春寒し

小綬鶏の呼び合ふ楡の葉陰かな

蟋蟀の初鳴き暗き長廊下

手作りのへチマ懐かし父の肩

星月夜瀬音静かに湯の香り

ぬれ縁の日向で交はす新酒かな

季節の移り変わりを、俳句で語る楽しみを覚え、心豊かな日々を過ごすようになりました。これからも未熟ながら学び精進したく頑張ります。

## あとがき

「句遊」第十七集をお届けします。  
第十六集以降、令和五年、六年の句遊会の活動状況は次のとおりです。

月例会	・	令和五年十二回、六年十二回
吟行	令和五年	四月 向島百花園
	令和六年	十月 伊香保（一泊）
	令和六年	四月 神代植物公園
		十月 鬼怒川（一泊）
画友会・写友会との合同展		
第三十八回	合同展	令和五年 六月
第三十九回	合同展	令和六年 七月
第四十回	合同展	令和七年 一月

これらの活動等で発表した自薦十八句、九名の作品です。（なお、作品中の新旧力ナ遣いは一句の中で混在しなければよしとしております）

次は二年後、会員のみなさまのなお一層のご健吟をお祈りします。

令和七年三月

編集委員長

森 邦彦

編集委員

佐藤 政夫

中山 祐伸

石原 克己

新谷 亮介

安井 正浩（記）

一般社団法人  
監査懇話会  
句遊会  
(代表 森 邦彦)